

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 3 4	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
Effects of alcohol consumption on hepatocellular injury in Japanese men. 日本人男性における肝細胞障害へのアルコール消費の影響	
執筆者	
Dakeishi M, Iwata T, Ishii N, Murata K.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Tohoku J Exp Med. 2004 Jan;202(1):31-9.	
キーワード	
アルコール消費、肝細胞障害、日本人	
要 旨	
<p>アルコール消費の閾値は1日当りエタノール換算で24-80gと言われており、この値は人種やアルコール文化によって異なっていることが考えられる。また、アルコールは生体へ様々な影響を与えるがアルコールがダメージを与える標的器官によってもこの値は変わってくると考えられる。γ-グルタミントランスフェラーゼ (GGT) や炭水化物欠損トランスフェリン (CDT) が有害な飲酒を最も初期に検出できると言われているが、必ずしも臨床的疾患との関連を示すものではない。アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ (AST) は肝細胞障害の重要なマーカーであり、アルコール誘導性の肝細胞壊死に対してもより特異性が高い。アラニンアミノトランスフェラーゼ (ALT) とアルコール消費の関連については議論が多く、結論ははっきりしない状態である。本研究では、アルコール消費の肝細胞障害への影響を調べるため、1113人の日本人セールスマンのASTとALT、GGTの活性を調べ、さらに1週間当りのアルコール消費量を質問票より算出した。AST、ALT、CGTの値とアルコール摂取には正の相関があり (p<0.001)、また年齢や体格指数 (BMI) とも正の相関が見られた。年齢、BMI、喫煙を考慮した場合もアルコール摂取とAST、ALT、CGTの正の相関は統計学的に顕著であった。ASTやGGTの上昇は4種類のアルコール飲料 (清酒、ビール、焼酎、ウイスキー) 摂取と正の相関があるにも関わらず (p<0.01)、ALTについてはウイスキーのみが相関を持っており (p<0.05)、他の3種類のアルコール飲料摂取とALTについては関係性が見られなかった。1週間当りのアルコール消費量 (エタノールg換算/週) の閾値を算出したところ、ASTでは362、ALTでは660、GGTでは252であった。日本人男性ではGGTやASTの閾値は西洋諸国で報告されているものの値よりも幾分、高めであるように見えた。また、日本人男性における肝細胞障害 (ASTレベルの上昇などで示される) は1日当り、50g以上のエタノール消費で出現してくるであろうことが示唆された。</p>	